第十六講　物語・小説の読解④

Step 1

一　次の文章は、「康平」が、友人である「日吉京介」がマスター（店主）をしている店「ルーシェ」で食事をし、家に帰ろうとしている場面から始まっている。日吉は、かつて、富山県の海岸を歩きながら、これから生まれてくる子どものために、親として頑張ろうと決意した。康平と日吉は、近いうちに、その日吉の思い出の地へ行くことにしている。これを読んで、1～4の問いに答えなさい。

「いや、もうそろそろ帰るよ。」

と言いながら、康平は、日吉京介の人相が以前とはまったく異なっていることに気づいた。

何がどう変わったのか具体的に言葉にはできなかったが、顔の芯を成すものが、晴れた日の凪（注1）いだ海のような穏やかさに包まれているように感じた。

この日吉の人相と同じ種類の何物かを持つ人間と接したことがあったが、それが誰だったのか康平には思い出せなかった。

「お前の顔、何かが変わったな。富山県の岩瀬から魚津までの二十キロを歩いてから少しずつ変わったのかな。」

と康平は言った。

日吉は調理場からしばらく康平を見つめてから、

「変わったと思うか？」

と聞いた。

「うん、一緒にいる人間を安心させてくれる顔だよ。」

「へえ、そんなこと言われたのは初めてだよ。」

日吉は皿を洗いかけていた手を止めて、康平の前に戻って来ると、そう言った。その瞬間、康平は、日吉のそれと同種類の、晴れた日の凪いだ海のようなものを持つ人間が誰であったのかを思い出した。脇田千春（わきたちはる）だった。

人相の中に共通する何かがあるというのではなく、脇田千春の場合は、その存在そのものが周りを穏やかにさせたのだ。

そうか、脇田千春が辞めたあと、営業一部に長く漂っている喪失感の根はそれだったかと康平は思った。

「息子が生まれたとき、どんなことがあっても、この子の前ではいつも笑顔でいようって女房（にょうぼう）と約束したんだ。でも、楽しくもなくおかしくもないのに笑顔を作るってのは、ほんとに難しいよ。俺、鏡の前に立って、何度も笑顔の練習をしたよ。最初のうちは、そんなことをしてる自分がばかみたいに思えたけど、一年二年とたつうちに、自然に笑顔が浮かべられるようになったんだ。そしたら、息子の前だけじゃなく、店でお客さんと接してるときでも笑顔になっちゃうんだ。意味もなく笑顔を浮かべるってのは、客に対して失礼かもしれないって気になってきて、店ではやめようと思うんだけど、顔がもうそういうふうになっちゃったんだなあ。」

と日吉は言った。

照れ隠しで冗談ぽく言っているが、ここに至る四年間には、①<u>他の人間には分からない自己訓練</u>があったのだなと康平は思った。

［A］ビストロ・バー（注2）「ルーシェ」の料理はおいしい。ビル（注3）のオーナー夫人のおかげだ。［B］、「ルーシェ」を繁盛（はんじょう）させている理由の半分は、マスターが醸（かも）し出す穏やかさと安心感なのだ。

小野建設機械リースのａ<u>営業部にこの半年あまり沈殿している</u>かすかな寂寥（せきりょう）感が、脇田千春という無口で地味な女子社員の退社によるものだと気づいている者はいないだろう。

脇田千春には、とりたてて目に見える特徴があったわけではない。仕事ぶりも、他の事務系女子社員の中で秀（ひい）でていたわけでもない。にもかかわらず、あの子の存在そのものは、殺気だった営業の最前線で働いている者たちの心をなごませ鎮（しず）めさせていたのだ。

康平は、そんな思いに浸ったあと、脇田千春のことを日吉に話して聞かせた。

「おとどい、若い連中と飲みに行ったとき、どうも営業部全体が寂しくなったって誰かが言ったんだ。うちの社はいよいよ②<u>悪［C］苦闘</u>の嵐の中に入って、みんな必死だし、営業本部長の病気は重いし、営業部が殺伐とするのは無理もないが、この寂寥感、喪失感の根本の原因は何だろうって。みんな、気合いを入れ直せって、そいつが酔った勢いでわめいたから、俺は俺が責められてる気がして、みんなに

謝ったんだ。そしたら全員が、次長のせいじゃないって。営業部、とりわけこの営業一部から何かがなくなったんだけど、その何かが何なのか分からないって。そうかあ。脇田千春だ。あの子は営業一部の片隅で、存在そのものだけで、みんなを安心させてたんだ。癒やしてたんだ。だけど、誰もそのことに気づいてなかったんだ。」

康平の言葉に、

「うん、俺は、③そんな人間の力を信じられるよ。」

と日吉は言った。

「俺が得意先からへとへとになって社に戻ったとき、あの子が熱い茶をいれて持って来てくれて、『部長(注4)、お茶です。』って言ったんだ。俺は何て言い返したと思う？『お茶だってことは見たら分かるよ。』って……。俺は、あのときのことを謝るために富山県(注5)下新川（しもにいかわ）郡入善（にゅうぜん）町に行かなきゃな。」

康平が言うと、日吉京介は、パソコンで入善町のサイトにアクセスし、駅の近くにあるホテルの宿泊料金などを調べた。

旅の初日は、岩瀬から魚津へと歩き、魚津から電車で入善駅へ行き、駅前のホテルに泊まることだけを決めて、康平は「ルーシェ」を出て家路についた。

（宮本　輝「田園発　港行き自転車」より）

（注1）凪いだ＝風や波が静まっていること。
（注2）ビストロ・バー＝軽い食事などを提供する小さな料理店。
（注3）ビルのオーナー夫人＝「ルーシェ」があるビルのオーナー夫人。「ルーシェ」で出す料理について、日吉に助言した。
（注4）部長＝このとき、康平は、営業一部の部長であった。
（注5）富山県下新川郡入善町＝脇田千春の故郷。脇田は、現在、富山県で働いている。

1 本文中の A 、 B にそれぞれ当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア A きっと B すなわち
イ A 確かに B しかし
ウ A やはり B なぜなら
エ A 例えば B だから

2 ――線②「悪 C 苦闘」が、「困難な状況の中で苦しみながら努力すること」という意味の四字熟語になるように、 C に当てはまる最も適当な**漢字一字**を書け。

3 ――線①「他の人間には分からない自己訓練」とあるが、日吉京介は、自分がどのような自己訓練をし、その結果、自分自身がどのように変化したと述べているか。文中の言葉を使って、**四十字**以上**四十五**字以内で書け。

4 ――線③「そんな人間の力を信じられるよ。」について、次の(1)、(2)の問いに答えよ。

(1) 本文では、日吉京介の言う「そんな人間の力」を持った脇田千春がいなくなったあとの、その場の雰囲気が、‐‐‐‐線a「営業部にこの半年あまり沈殿しているかすかな寂寥感」という言葉で表現されている。文中には、これと同じように、「そんな人間の力」を持った脇田千春がいなくなったあとの、その場の雰囲気が表現されている言葉がある。その言葉として最も適当な言葉を、‐‐‐‐線aより前の文中から**十五字**でそのまま抜き出して書け。

(2) 本文では、「そんな人間の力」を持った人物として、日吉京介と脇田千春のことが、康平の視点を通して描かれている。次の表は、二人それぞれの、「康平に、晴れた日の凪いだ海を思い浮かべさせるもの」と「周りに及ぼす影響」についてまとめたものである。表の［a］、［b］、［c］、［d］に当てはまる最も適当な言葉を、［a］は**八字**で、［b］は**十三字**で、［c］は**六字**で、［d］は**十一字**で、それぞれ文中からそのまま抜き出して書け。

康平に、晴れた日の凪いだ海を思い浮かべさせるもの	周りに及ぼす影響
日吉京介の［a］	日吉京介の［a］が穏やかさに包まれており、そのことが、［b］いる。
脇田千春の［c］	半年前までは、脇田千春の［c］が、営業部の人たちの［d］いた。

【愛媛県】

a

b

c

d

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

> 父の期待に応（こた）えて都会の大学に入学した兄の翼が、孤独な生活に耐え切れず自宅に戻り、しばらくたったある日、兄と母とわたしが話をしている途中、昔のプレゼントのことを思い出した場面である。

「①『お休み券』をくれたのって、いつだったっけ？」

一瞬きょとんとしたけど、すぐに、ああ、とA思いだした。

いつも家事にオわれているお母さんに、たまには休んでほしいと思ってプレゼントしたのだ。バスの回数券みたいに十枚綴（つづ）りにして、券を一枚出せば十分間だったか、わたしとお兄ちゃんがお母さんのかわりをする、というB取り決めだった。

お母さんはそのプレゼントを大喜びしてC受け取った。でも、結局一枚も使わなかったな、と思いだした。『お休み券』をつくろうとD言いだしたのはお兄ちゃんだったということも、いま思いだした。やっぱり根っこは優しいひとなのだ。お母さん似かもしれない。

「あの券、お母さんが誰（だれ）かにプレゼントしてもいいのよね？」

わたしと顔を見合わせてうなずくお兄ちゃんに、お母さんは「はい」と右手を差し出した。指がなにかを挟む形になっていた。

「実物はどっかにいっちゃったけど、はい、これ、あんた使っていいわよ。たまには休んでいいのよ」

お兄ちゃんは黙って②お母さんから目をそらした。すねたわけじゃない。逃げているのとも違う。それがわかるから、わたしはなにも言わない。

お母さんはマボロシの『お休み券』をテーブルに置いて、「お父さんにも一枚あげようかな」と笑った。「③いま、ほんとに大変だし、これからもずうっと大変なんだから……」と言ったそばから、玄関のチャイムが鳴った。お父さんが帰ってきた。

わたしはお兄ちゃんに「ほら、『お休み券』持っていかなきゃ、なくなっちゃうよ」と言って、テーブルを指差した。結構うまいことを言ったつもりだったけど、④お兄ちゃんはこわばった顔で、わたしが指差したのとは違うテーブルの一点をじっと見つめていた。

お父さんが「ただいま」とダイニングに入ってきた。見るからに疲れている。お兄ちゃんは立ち上がった。

「あのさ……俺(おれ)、大学やめて、帰ってきて、こっちの大学受け直す」

お父さんが黙って振り向くと、間(ま)が空くのを怖がるように、お兄ちゃんは□つづけた。

「なんでかっていうと、まあ、俺のほうの気持ちってのもあるんだけど、おばあちゃんの具合が悪いわけでしょ、これから大変でしょ、お父さんもお母さんも、一人でも戦力っていうか、使える手があったほうがいいわけじゃない、俺、それやるよ、畑の手伝いとか、病院に連れていったりとかすればいいんだと思わない？」

お父さんは黙ったままだった。お母さんは、やめなさい、翼、もういいから、と二人の間に入って止めた。

でも、お兄ちゃんはかまわずつづけた。

違うよ、と言いたかった。お兄ちゃん、それ違う。絶対に違う。

「こっちの大学だったら、それほど必死に勉強しなくてもなんとかなるし、ちょっとでもウチのことやりたいっていうか、役に立ちたいっていうか、親コウコウしたいわけだよ」

「いいでしょ？　お父さん、俺、こっちに帰るから、こっちで勉強もするし、みんなのためにがんばって――」

お母さんがお兄ちゃんにビンタを張った。お兄ちゃんは左の頬(ほお)に手をあてたまま凍りついてしまった。

「生意気なこと言わないで！」

⑤お母さんは涙声を張り上げた。「ひとのことを言い訳につかうのはやめなさい！」――声にもっと涙が交じって、あとはもう、その場にしゃがみ込んで顔を覆ってしまった。

お兄ちゃんはまだ左の頬に手をあてたまま、なにも言えない。

帰郷したお兄ちゃんを一度も叱(しか)らず、お父さんからかばいつづけていたお母さんが、初めて、感情を爆発させた。

そして、いままで怒りどおしだったお父さんは、初めて、おだやかな笑顔でお兄ちゃんを見つめた。

「自分のことだけ、考えろ」

静かに言って、お母さんの丸まった背中にそっと手を置いた。「先に風呂（ふろ）に入ってくる」と声をかけると、お母さんは嗚咽（おえつ）交じりに「お湯、抜いといて」と言った。そのやり取りを聞いた瞬間、なんだか、うまく言えないけど、どうも、その、子どもは親には一生かなわないんだなあ、とわたしは思ったのだ。

（重松　清「季節風　春」より）

Step 2

問1　本文中の〰〰線部の漢字については読みがなを、片仮名については漢字をそれぞれ書きなさい。

オわれて　[　　　]われて　　コウコウ　[　　　]　　覆って　[　　　]って　　帰郷　[　　　]

Step 2

問2　①『お休み券』を……いつだったっけ?と言ったのはだれか、書きなさい。

[　　　]

Step 2

問3　══線部A～Dについて、時間の経過順に並べるとどうなるか、符号を書きなさい。

[　　→　　→　　→　　]

35

Step 2

問4　②お母さんから目をそらしたとありますが、このときの兄の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　いらだたしい気持ち　イ　よろこばしい気持ち　ウ　うしろめたい気持ち　エ　うっとうしい気持ち

Step 2

問5　③いま、ほんとに大変だしとありますが、父の大変な様子が描写されている一文を、本文中から抜き出して書きなさい。

Step 3

問6　④お兄ちゃんは……見つめていたとありますが、兄は、なぜこのような様子だったのか、書きなさい。

Step 3

問7　本文中の□に入る語として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　悲しげに　イ　しみじみと　ウ　堂々と　エ　一息に

Step 3

問8　⑤お母さんは涙声を張り上げたとありますが、母がこのように感情を高ぶらせたのはなぜか、その理由を五十字以内で書きなさい。

Step 3

問9　この本文のあと、「わたし」が、兄に対して言葉をかけるとしたら、どのような言葉をかけると考えられるか。その言葉とそう考えた理由を、本文の内容をふまえて書きなさい。

言葉

理由

【石川県】

〈Note〉

第十六講　物語・小説の読解④

Step 1

一

解答

1、イ　2、戦　3、鏡の前に立って、何度も笑顔の練習をした結果、自然に笑顔が浮かべられるようになった。（41字）（同意可）

4、(1) 営業一部に長く漂っている喪失感　(2) a、顔の芯を成すもの　b、一緒にいる人間を安心させて　c、存在そのもの　d、心をなごませ鎮めさせて

解説

1、Aには、「ルーシェ」の料理がおいしいことを、間違いないと認める言葉が入る。Bでは、「ビルのオーナー夫人のおかげ」であるという前文に対し、「マスター」のおかげでもあるという考えを示している。

3、息子の前で笑顔でいるために、「鏡の前に立って、何度も笑顔の練習をした」結果、「自然に笑顔が浮かべられるようになったんだ」と述べている。

4、(1) 日吉と「同種類」の穏やかさを持つ人間として、脇田千春を思い出した場面で「そうか、脇田千春が辞めたあと…それだったか」と納得していることに着目する。(2) a、日吉京介について「晴れた日の凪いだ海の…包まれている」ように感じさせたものをおさえる。b、日吉から「変わったと思うか?」と聞かれたときに、自分が感じていることを答えている。c、「とりたてて目に見える特徴があったわけではない」という脇田千春について、「あの子の存在そのもの」が周りを穏やかにさせたとしている。d、「殺気だった営業の…働いている者たちの心」に与えた影響をおさえる。

Step 2・3

二

解答

問1、(オわれて)追(われて)　(コウコウ)孝行　(覆って)おお(って)　(帰郷)ききょう　問2、お母さん　問3、D→B→C→A
問4、ウ　問5、見るからに疲れている。問6、大学をやめたいという自分の気持ちを伝えることで、父の怒りを買うのではないかと不安に感じていたから。(同意可)　問7、エ　問8、兄が、自分の本心を言わずに、大学をやめる言い訳として、親の手助けや祖母の世話の話を持ち出したから。(49字)(同意可)　問9、(例)(「言葉」)「自分の気持ちを正直に言った方がいいよ。」(「理由」)兄が自分の思いを素直に伝えずに、母を怒らせてしまったことを残念に思ったから。

解説

問2、「くれた」は、もらった人物がつかう言葉である。「いつも家事にオわれているお母さんに…プレゼントしたのだ」とあることに着目する。
問3、母に「お休み券」をプレゼントしたときのことを思いだしているのは、現在の場面である。兄がつくろうと言いだし、兄とわたしの間で内容について取り決めをしたあとで母にわたした、という「昔」の展開をおさえる。
問4、孤独な生活に耐え切れず自宅に帰っているときに、母から「たまには休んでいいのよ」と言われたことへの気持ちを考える。
問5、帰ってきたときの父の姿に着目する。
問6、父に「大学やめて…こっちの大学受け直す」と切りだす直前の気持ちを考える。
問7、「間が空くのを怖がるように」とある。時間が空かないように話しつづける様子を表す語が入る。
問8、兄が大学をやめる理由として「おばあちゃんの具合が悪いわけでしょ」「お父さんもお母さんも…使える手があったほうがいいわけじゃない」などと言ったことへの反応であり、「ひとのことを言い訳につかう」ことに感情を高ぶらせている。
問9、兄が「ちょっとでもウチのこと…したいわけだよ」と言ったことに対し、「わたし」が「お兄ちゃん、それ違う。絶対に違う」と思っていることをおさえ、このあとに母や父が兄へ言ったことと合わせて考える。